

視覚情報の変化と手指の運動学習効果について

新座病院リハビリテーション科

作業療法士 齋藤亮

要旨：前回の研究で、速さを重視し、反復的に手の中で物体を操作するような手指の運動において、限られた時間内での学習では閉眼で行うことがスキル向上に有効であることが示唆された。今回は視覚情報の変化が運動学習の結果に差を生み出すかを調べた。右利きの健常成人 20 名を対象に閉眼・開眼状態で鉄球回し課題を行った。課題では左手で 50 秒間できるだけ速く 2 つの鉄球を回してもらい、手の中で鉄球の位置が入れ替わった回数と、手の中から鉄球を落とした回数を計 4 回計測した。ただし 4 回目の課題では視覚情報の有無を入れ替えた。また課題に先駆けて 100 秒間の練習時間を設け、1Hz のペースでメトロノームを鳴らし、1 音に対して 1 回鉄球の位置が入れ替わるように回すことを依頼した。実験の結果、運動学習の前半には視覚情報を入れずに学習し、後半では視覚情報を取り入れ運動学習していく事が有効である可能性が示唆された。

キーワード：運動学習、手指、視覚、体性感覚